

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第127回 ●

■ チーム世界戦

コロナでしばらくチーム世界戦がなかったが、チーム世界戦が今年久しぶりに中国で開催された（コロナで2回開催されず、6年ぶり）。結果は既報の通り中国チームが1〜3位を占め、層の厚さを見せつけた。日本チーム1は4位と、惜しくもトップ3には入らなかった。では、早速日本チームの棋譜を何局か見てみよう。

その前に今回から開局規定が変わったことを知っておかなければならない。従来の四珠交替打ちから五珠交替打ちに変わったのだ。具体的にはタラグチ10になるのだが、黒5まで一手ごとに交替できるというのがざっくりとした説明になる。

● 1回戦
これを踏まえて見てみよう。

黒 中国 2 He Shunjun
白 日本 井上史也

記録ではX X ———となつているのでスワップが2回あったことになる。おそらく、

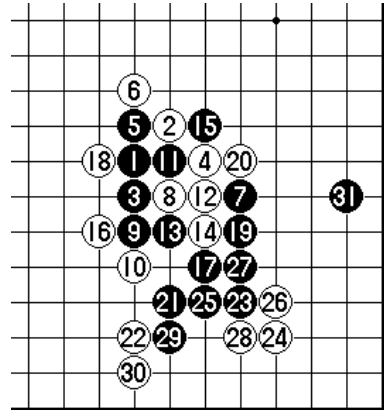
黒1 ㊦が1を打ち、井上が交替
白2 ㊦が2を打ち、井上が交替

黒3 ㊦が3を打ち、井上は交替せず
白4 井上が4を打ち ㊦は交替せず

黒5 ㊦が黒5を打ち、井上が白を選択
という過程で黒5までが作り上げられたと思う。日本人的には珠型まで仮先が

一気に示しても良さそうだが、世界の考えは黒1から駆け引きが始まっているため黒1から交替権が発生した方が良いというのが主流である。（例えば彗星のスペシャリストには彗星を避け

る駆け引きとなる）

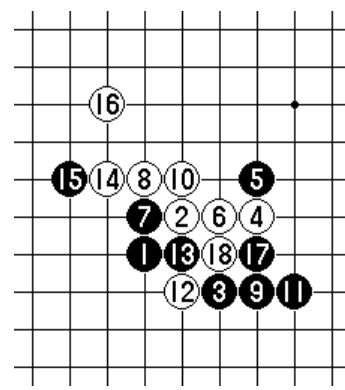


黒5までは従来でも出ていた形なので、タラグチになっても結局は似た様な形になることが多い。

さて、局面だが、黒11と入った形が意外に厚く、白が防ぐのが難しそうに感じる。これが中国の壁か？中国はお題を与えればとことん研究するというイメージがあるが、こういう形も研究済みなのだろうか？白16では17に延びておくところ、黒17と引かれては上下に勝ちが残る形となった。これでは井上君も力を発揮できない。

● 1回戦

黒 日本 舘 雅也
白 中国 2 Jiang Qiwen

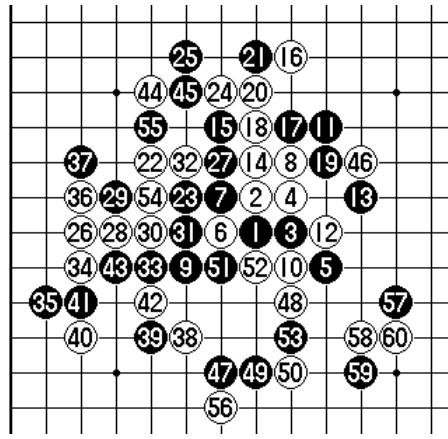


続いて舘君の棋譜も見てみよう。日本1は岡部九段が仕事で後半からの参加のため、前半は4名でフル稼働である。井上、舘両名に頑張ってもらわないと上位が望めない。せめて満局でも、と思っていたがやはり中国に壁は厚い。黒5まではいかにも五珠交替打ちという棋譜になった。さすがにこういう手までは研究していないと思うが、実戦一番黒を咎めた。黒9が大失着で、白10とけん制されては打つ手が無い。

こういう時はまず13と三を引く所から考えたい。剣先を作らずに全部を防ぐのはなかなか難しいことが多い。覚えておくと良いだろう。

● 1回戦

黒 日本 1 中山智晴
白 中国 2 Huang Liqin



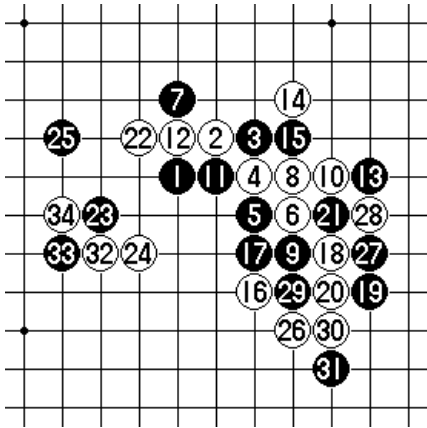
本局で興味深いのが、1〜5まですべてスワップしなかったという点である。つまり、1〜5まで順番通りに打ったということである。タラグチはお互いの意思が通じていればこのよう

にスラスラ（かどうかはわからないが）進むことも多い。結局昔から打たれている形に戻った。中国側も研究しているのだろう。神谷、中山には満局で十分と言う作戦が見て取れる。これを打ち破る作戦を披露したいところだが、1回戦とあってお互いに慎重になったの

だろう。比較的短手数で満局となった。

● 1回戦

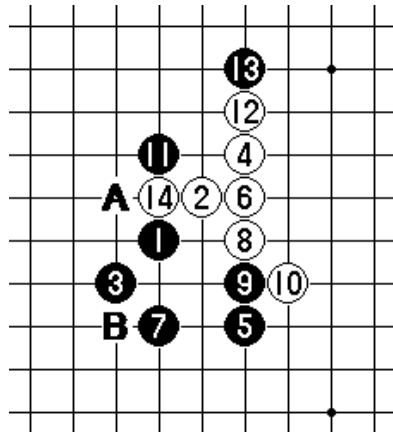
黒 日本 1 神谷俊介
白 中国 2 Cao Dong



本局はもっと短い手数で満局となった。サオにとっても神谷名人と満局なら十分と思っただろう。白34と相当早く満局となっている。

● 1回戦

黒 日本 2 丸田浩貴
白 マカオ Lo Chan Hin

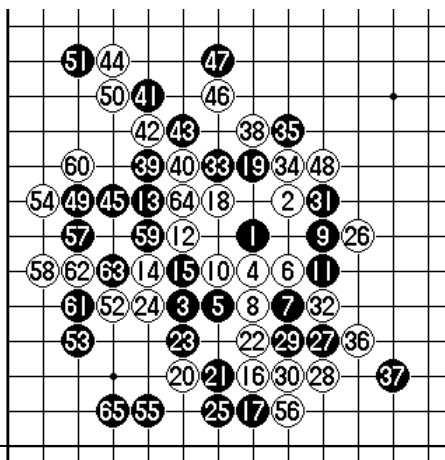


一方、日本2の初戦はマカオであった。丸田君の初戦だが、白4もいかにもタラグチらしい作戦。白6まで一体どちらが読み勝っているのだろうか？実は黒が勝っており、黒7からA Bの順に引いていけば以下簡単だった。実戦は黒7とさら

にけん制しようとしたため、以下白追い詰めとなってしまった。RFの玉で相手の選手を調べてみたら、何と2021年生まれの少年だった。いや、世界は進んでいる。

● 1回戦

黒 中国 1 Mei Fan
白 中国 3 Wang Qingqing



最後に中国同士の一戦も紹介しよう。黒は梅凡、白はWTを優勝した神谷夫人である。このスタートで黒は良く勝ち切った。黒39が好点だった。